田んぼわらしの ささやき
田んぼ10年だより

第 16 号　2019 年 10 月 23 日発行

田んぼの生物多様性向上10 年（略称：田んぼ 10 年）ニュースレター
発行：NPO 法人ラムサール・ネットワーク日本（ラムネット J） 水田部会
所在地：〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F
TEL/FAX：03-3834-6566　電子メール：info@ramnet-j.org
ホームページ：http://www.ramnet-j.org

目 次

田んぼでとれる万葉の食材「ミズアオイ」 日本ビオトープ協会　顧問　平塚　明 ..... 1～2
中池見湿地での田んぼジビエを楽しむ試み　中池見ねっと　上野山雅子 2
田んぼ 10 年　地域のヒアリング 「徳島県・小松島と鳴門訪問」 金井　裕 3
水田部会からのお知らせ / 編集後記　他 ..... 3～4

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

田んぼでとれる万葉の食材「ミズアオイ」

日本ビオトープ協会　顧問　平塚　明

「醤酢(ひしおす)に　蒜(ひる)搗(つ)き合(か)てて　鯛願ふ　われにな見えそ　水葱(なぎ)の羹(あつもの)」　万葉集

もろみ酢にノビルを薬味にして鯛を食べたいな。と願っている私に、日常的に食べている「なぎ」のお吸い物なんか、見せてくれるな。

この「なぎ」は、一般にはミズアオイ(ミズアオイ属の一年草)の古代名と考えられています。ただ、同属のコナギは、とくに生育期前半の姿がミズアオイととてもよく似ており、しばしば混同されたようです。したがって、この一首をコナギについて歌われたものと解釈してアプローチしたのが呉地正行さんでした。

呉地さんは、田んぼで穫れるものはコメだけではないとのお考えから、「コナギを愛でて食べる会」を主宰してこられました。その一つが８月４日、宮城県栗原市瀬峰の通称「田守村(たっしゅむら)」という農場で開かれました。ここは、同県大崎市田尻で有機農業を営む齋藤肇さんを中心に、さまざまな分野の人たちが集う場所です。自分も参加しましたが、それには理由があります。

私は東北太平洋沖地震以来、津波浸水域から一斉に復活したミズアオイを追いかけて来ました。岩手・宮城・福島沿岸の水田地帯では、農道を乗り越えた津波が田んぼをえぐり、深く埋まっていたミズアオイのタネを地表に引き上げ、広範囲に散らしました。浸水域に満ちた潮水が少しずつ淡水に置き換わった頃、そのタネたちが一斉に発芽し、夏には、浅い水面全体を青紫色の花で埋め尽くしました。

震災以前から、ほとんどの県で絶滅危惧となっていた植物です。多くの人にとって生まれて初めて見る花であり、光景でした。その美しさは災害の悲惨さとあまりにかけ離れていただけに、一層、鮮烈な印象を残しました。

しかし、この復活が続いたのは、ほんのわずかな時間に過ぎません。復田作業や復旧・復興工事によって、ミズアオイは再び地上から姿を消したからです。津波が起きてから二回ほど巡ってきた夏に大量の種子が作られ、土の中に残ったはずですが、とくに分厚い盛り土の下敷きになったところでは、もう永久に芽生えることはなくなりました。つまり、ミズアオイは「二度死んだ」とも言えます。

この植物を少しでも残すために、三県の沿岸各地で種子や遺伝子分析用の葉を集める一方、岩手でイネとミズアオイが共存する水田を小学生たちと造りました。それが古代の、本来の水田であろうと考えたからです。コメと一緒に穫れたミズアオイも食べました。(ただ、そのときは薹の立った個体を使ったせいか、少し苦みが残りました。)

つまり、冒頭の歌の「なぎ」はミズアオイであるとして活動を続けてきました。そんな自分が二十年ぶりに宮城県に戻り、こちらでも何かを始めようとしたときに知ったのが呉地さんのコナギを愛でて食べる会でした。うれしい驚きとともに、是非レシピを知りたいと伺ったのが、田守村での集いでした。

ミズアオイの花（撮影：細谷）

ミズアオイの話をする平塚さん

収穫したミズアオイとコナギ

そうめん流しに天ぷら

この日の食材のコナギとミズアオイは齋藤さんの有機栽培水田で穫れたものです。なぜかミズアオイの葉の天ぷらも流れてくる流し素麺、コナギの冷製スープ(ビスク風)、さらには沼で獲ったばかりのコイを捌いての唐揚げなど、湿地生態系の生きものたちをまるごといただきました

食が進みながら生態学的な話も弾んだのですが、もう一つのテーマは考古学でした。古代の田んぼはどのような姿だったのだろうか、人々は田んぼから何を穫って食べていたのだろうか。食材が出土品としては残りにくくても、今、実際に食べてみることで推測はできるはずだと。

ミズアオイを絶滅に追い込んだ最大の原因は、除草剤です。しかし、除草剤の連用は、抵抗性タイプのミズアオイやコナギも生み出しました。おそらく、現在の田んぼで生き残っているこれらの植物は、ほぼすべて抵抗性だと思います。ところが、津波浸水域から復活したミズアオイの中には、除草剤が効いてしまう、つまり感受性タイプも混じっていました。日本の田畑が農薬に覆われるはるか以前、生きていた植物たちのタネが、津波によって長き眠りから覚めたことになります。

感受性タイプのミズアオイやコナギこそが、万葉人が食べていた「なぎ」です。齋藤さんの無農薬田んぼで採れたミズアオイやコナギをいただきながら、そんな話を交わしました。

中池見湿地での田んぼジビエを楽しむ試み

NPO 法人中池見ねっと　上野山 雅子

中池見湿地（福井県敦賀市）は、市街地に隣接する広さ 25ha ほどの湿地です。2012 年、特異的な地形や地質に加えその生物多様性の高さからラムサール条約湿地に登録されました。しかし、その保全には多くの課題があり、特に保全のためのマンパワー不足は深刻です。そこで湿地の恵みを活かしつつ楽しく保全に関わっていただきたいと、田んぼ周辺の動植物“田んぼジビエ”を食べる試みに取り組んでいます。

中池見湿地では、かつて全域で水田耕作が行われていましたが、今は全体の 1 %にも満たない面積で水田生態系を守るための田んぼ作りを行っています。その一つが市民によるミニ田んぼサポーター事業です。

ミニ田んぼとは、5m×5m に区切った小さな田んぼのことで、一区画づつを市民サポーターに割り当て、田植えから稲刈りまでお世話いただき、自分たちで育てたお米を持ち帰っていただくというものです。

このミニ田んぼでは、昨年度 27 種の絶滅危惧種を確認し、中でも県内で中池見湿地にしか自生していないデンジソウ（絶滅危惧Ⅱ類）はかつて悪草と呼ばれていた頃の勢いで繁茂しています。希少な植物だからと遠慮していると明らかに稲の育ちが悪く米が実らず、昔のお百姓さんの苦労を知ることになります。とはいえせっかく蘇ったかつての生き物賑やかな田んぼを楽しんでいただきたいと昨年行ったのが、“ミニ田んぼでご飯もおかずもいただきます企画”でした。

収穫（草取りです）したデンジソウは青臭さもなく香ばしささえ感じるような味と食感でとても美味しいお浸しになりました。ほかにもオオタニシはパスタにアメリカザリガニはパエリアにして“田んぼジビエ”を楽しみました。

特にアメリカザリガニは泥吐きさせて塩茹でしたところ、身の入りは少ないものの本当に美味しいスープが取れます。また、寄生虫の心配から 10 分以上火を入れましたが身が硬くならずエビやカニのように美味しい身でした。さらに泥吐きをさせなくても背ワタさえとれば、美味しく食べられることもわかりました。

アメリカザリガニは中池見湿地の生態系にも深刻な影響を与えてきた外来生物です。この 10 年で 8 万匹以上防除し、3 年前からは毎月第 3 日曜日を『ザリガニバスターズ』の日として、市民ボランティアといっしょに行っています。そして今年の夏休みにはこのザリガニバスターズの拡大版として『ザリガニとり選手権』を開催。ザリガニバスターズへの関心を高めたいと、カレー専門店の協力を得てザリガニカレーを提供しました。予想を超える申し込みに、当初予定していた倍のザリガニが必要となり、普段以上に必死でザリガニをとることになりましたが（笑）、何とか皆さんに美味しく召し上がっていただくことができました。

ちなみに 24 チームが 1 時間ほどで 910 匹を防除。優勝したのはミニ田んぼサポーターのキッズたちのチームで、いつもの田んぼ周りで稚ザリを中心に 159 匹も捕ってくれました。

アメリカザリガニもタニシもそしてデンジソウも、農薬とは無縁の中池見湿地だからこその安心食材です。これからも、美味しく楽しい保全活動につながるように、田んぼジビエや田んぼ雑草を美味しくいただく方法を、みんなでわいわい試していきたいと思っています。

ザリガニ獲り選手権で優勝したキッズたち

田んぼジビエのパエリヤ

ザリガニカレー、おいしい！

田んぼ 10 年　地域のヒアリング 「徳島県・小松島と鳴門訪問」　　金井　裕

2019 年の 9 月 4 日に徳島県西部の小松島市、5 日には鳴門市を訪れて、田んぼの生きものに配慮した農業活動を聞いて来ました。この地域では、かつてからナベヅルやコウノトリが飛来し、その定着を目指した活動が農業者によって行われています。

4 日は、有機農業研究会の中村隆宏さんの案内で 11 時半から小松島市役所の会議室で市産業建設部副部長の小林潤氏はじめ農林水産課の樫福氏、加藤氏、小松島市生物多様性農業推進協議会の石原氏、日本野鳥の会徳島県支部の鹿草氏、里地景観をつくる会の近藤氏らと、意見交換を行いました。小松島市では、生物多様性農業推進協議会を作り、無農薬有機稲作を推進するだけでなく、慣行農法でも一層の減農薬を進めています。また、今年は高温対策もあり中干しをしていないとのことでした。

午後は、ナベヅルの越冬環境づくりを進めている日本野鳥の会自然保護室の伊藤加奈子氏の紹介により、太田川土地改良区組合事務所で井原英則理事長ほか 4 名の組合員の方々からナベヅル保全の取り組み活動のお話をお聞きしました。ここでは、①秋耕の時に一部を耕耘しないで、ツルの食物として二番穂を残す。②冬期間に水たまりができるように、耕運機の轍など溝を一部に作る。の二点を組合員に呼びかけています。また自衛隊の送信所敷地の遊休地があるので、そこを浅い池をつくる働きかけも考えています。7 月には田んぼの生きもの調査も行い、これらの活動が新聞でも紹介されたとのことで、活動を加速させていきたいとのことでした。

5 日は、日本野鳥の会徳島県支部長の三宅武さんの案内で、コウノトリの営巣地を訪問し、板東南ふれあいセンターでコウノトリ定着推進連絡協議会長の竹村昇氏のお話をお聞きしました。営巣地は蓮田と水田が混在する場所で、三宅さんは、この地域の水田と蓮田が混在し、またレンコン栽培は、年数回の収穫期があるため、同時に植え付け直後から葉が茂っている場所まで様々な段階のハスがあることが、コウノトリの採食に適していると話していました。竹村さんもレンコン農家で、多くの農家さんが農薬の種類を変えて、収穫は少なくなるが生きものが多い蓮田としてくれていること、これらの農家さんを支えるために「コウノトリレンコン」のブランド化を進めていることを話していただきました。

2018 年のラムサール条約 COP13 では、水田決議を発展させた「湿地の農業で生物多様性を進める」決議も採択されました。蓮田は水田と並ぶ湿地保全の農業と言えます。来年は、小松島市で田んぼ 10 年の地域交流会を企画したいと考えています。

コウノトリと蓮田と水田　手前の水面が収穫後の蓮田

改良区の説明をする井原英則理事長

コーヒーを飲んで自然保護　コーヒーズー（COFFEE ZOO）

カフェを舞台に「種の保全」を考える考えるキャンペーン「コーヒーズー」が 11 月 22 日から東京・大阪など各地のカフェで始まります。店舗ごとに割り当てられた絶滅危惧種の「スペシャル動物ブレンド」を飲むと、その動物のイラストが描かれたカードがもらえ、コーヒー代の一部が IUCN 日本委員会を通じて自然保護団体に寄付されるという企画です。ラムサール・ネットワーク日本も参加しています。

このキャンペーンのイベント告知と制作資金のためのクラウドファンディングが下記のサイトで 11 月 13 日まで実施されています。是非ご支援をお願い致します。

URL：https://camp-fire.jp/projects/view/188237

水田部会からのお知らせ

第 10 回田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト
地域交流会 in 福井（敦賀市）

日時：11 月 2 日（土）3 日（日）
場所：福井県（ラムサール条約湿地バスツアーあり）
詳細は同封のチラシをご覧ください。

第 10 回田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト
全国集会 in 有明 TOKYO

日時：11 月 7 日（土）10：00～17：00
会場：TFT ビル　研修室 905 号室（国際展示場近く）
★取り組み事例発表者　募集中！

■アンケートにご協力下さい■

10 月 10 日に、ラムサール・ネットワーク日本の「田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト」に登録いただいたみなさまに緑色の封筒で、アンケート票をお送りしています。
田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクトの 10 年間の締めくくりとして、取り組みの成果を評価するために実施するものです。お手数ですが、何卒ご協力をどうぞよろしくお願い致します。

エコプロ 2019@東京ビッグサイト

日時：2019 年 11 月 5 日～7 日
会場：東京ビッグサイト[西ホール]
★ブース当番を募集しています。3 名程度（旅費支給）

田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト分科会
@にじゅうまる COP4（名古屋）

日時：2020 年 1 月 12 日（日）
会場：名古屋国際会議場内

編　集　後　記

実りの秋を迎え、今年も新米や柿やミカン、リンゴやクリなどが美味しく頂けることに感謝しています。一方、身の回りの環境にも気候変動の影響による事象が数多く出現するようになってきていています。湿地の生物多様性の保全・賢明な利用を通じて持続可能な地域づくりに貢献し、気候変動がこれ以上進行しないようにすることは、今を生きる私たちの責任。未来の子どもたちも自然の恵みを受け続けられるように、『自然と共生する社会－愛知ターゲット長期目標（2050 年目標）』を実現させたいと思います。　安藤よしの

情報をお寄せください

田んぼ 10 年事務局では、皆様からの情報をお待ちしています。
是非、皆様の活動の様子を、メーリングリストや田んぼだよりでご紹介ください。　寄稿歓迎
また、「このような内容の記事を掲載して欲しい」などというご希望もお寄せ下さい。

■田んぼ 10 年プロジェクト
新規登録者　なし
（2019 年 4 月～2019 年 9 月）

田んぼ 10 年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。

連絡先/事務局
ラムサール・ネットワーク日本
info@ramnet-j.org
FAX:03-3834-6566

田んぼ 10 年プロジェクトは、にじゅうまるプロジェクトに参加し、
国連生物多様性の 10 年日本委員会の連携推進事業に認定されています。

このニュースレターは、2019 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。